



童話の部  
優秀賞

第39回 日産 童話と絵本のグランプリ

# オトやんのかぐら

た に だ とし ゆき  
多仁田 敏幸

ぼくが最初にオトやんを見たのは、アリの行列を観察していたときだった。ほおかむりをした顔は日焼けして黒い。作業ズボンはずす汚れ、大きなかごを背おっている。彼はぼくを無視し、目の前をすたすたと歩いていった。開けつばなしの玄関から入り、「こんにちはー。」

でつかいガラガラ声だった。土間にかごを置き、何やら準備する。アリなんか、もうどうでもよくなった。日焼けした異星人。ちよつと怖い。彼がふりむくと、いつでも逃げるつもりだ。「あらー、久しぶり。」

おばあちゃんは顔をのぞかせた。「今、つけ物つけとるで、やつといてくださいな。」

奥におばあちゃんは戻った。かごから赤い着物を出してはおり、オトやんは、プラスチック製のおたふくの面をつけた。見えない観客におじぎをする。

「われはアマテラスオオミカミ。こたびのササノオノミコトの行いおそろしく、あまのいわとにわれさしこもりさす。」

細い声をだし、女の人のまねをしているようだ。何を話しているのか。小学五年のぼくには、さっぱり分からない。面をはずし、笛を吹きはじめた。なんだか、のびやかな悲しい曲だった。大きな梁が横たわる天井に、ほわほわと音色が昇っていく。

(このおじさん、何してるんだろ?)

不思議な力がぼくを引き寄せた。笛を置き、金銀模様の紙の羽織に着がえる。右手に白いふさの付いた棒、左手には鈴を持ち、シャンシャ、リンリン。ゆつくり円を描いて歩く。そして笛に持ちかえ、こんどは速いテンポで、弓矢みたいに音を飛ばした。

銀紙貼りの刀を垂直に構え、オトやんは回る。黒い土がうねって、波になる。見た事のない舞いだ。よろけて、転びそうになっても回る、回る。

終わるとオトやんはおじぎをした。土間の赤い廊下にこしかけ、オトやんは汗を拭いた。

おぼんには、お菓子とティッシュに包まれた小銭があった。

オトやんがいなくなると、「あのおじさんだれ?」

ひと月前に、父と神戸からやつてきたぼくは、おばあちゃんにきいた。「オトやんという人じゃ。」

「さっきの踊りは何?」

「神楽というんじや。毎年この村でもやつとるよ。あの人はね、不幸なことがあつて、ああしてお金をかせいでいるんじや。」

「不幸つて、どんな。」

「子供は知らんでええことじや。」

おばあちゃんは畑へいった。ぼくも草取りをしなくちゃ。少しくらい手伝いをしておかないと、晩ご飯のとき、「遊んでばかりじゃあ。」とブツブツいわれる。ご飯がまずくなる。

学校への途中で、ぼくはオトやんのことを話した。

「やつは、怖い人やで。おやじを、焼き殺したんじやけえ。」

「どういうこと?」

「知らん、あなたのおやじに聞きなさい。」

背の高い雑草をちぎって、同級生は、

オトやんが  
パンツン中に しっこしてー

ぼつちいぼつちい 怒られたー

と、下級生たちと歌いはじめた。ぼくも誘われた。

「はいつ、オトやんがー。」

でも……、そんな歌は苦手だ。背中をたたかれても、腕をつかまれても歌えない。

一生懸命おどるオトやんが、思い出される。神楽は下手かもしれない。でも、馬鹿にされることじやない。

ぼくの父は郵便局で働いていた。臨時雇いなので、帰ってくるのは早い。もどるとすぐお酒を飲んでいる。酒の匂いは嫌いだ。

「そんな歌を歌うやつらと、無理に仲よくせんでええ。」

父はぼくの頭をなでた。

炭焼きにいったとき、自分のお父さんが中にいるのに、オトやんは、かまのふたを閉めたらしいのだ。父は泣きそうな顔をして教えてくれた。

「オトやんは、少し頭がお……。あれは事故なんじや。」

まずそうに、父はビールを飲んだ。

稲刈りが終わった。手伝いにきてくれた友と、父は宴会をしていた。

「あいつはお。親殺しじゃけん。」

「気をつけんな。」

山ちゃんも、はつしやんも赤い顔をして、スルメをかじりながらオトやんを悪くいつている。

「もうやめんさい。オトやんには、世話にもなつとるんじやけ。」

田植えや草かり、稲刈り。いろんな家でオトやんは、仕事をする。みんなはお礼に、少しお金を渡したり、ご飯を用意したりする。そのことを、父はいつているのだ。

「飲んだら、調子よいことばつかだ。」とか「大ぼらしか吹かない。」と、ぼつちやんにあきれられているが、今日はまじめな父だった。

「じゃが、ほんまいじゃ。」

山ちゃんが逆らう。

「アホッ。」

父は頭をこづいた。

「イタツ、何するんじや、ワシはもう

帰る。」

キレた山ちゃんが立ち上がると、

「わしもそろそろ。」

はつしやんも腰をあげた。父は困った顔で、みんなと外に出た。

「あらーつ、ゆつくりすればいいのに。」

ご飯に、するけえ。」

ばつちやんは、にっと笑う。

「あんまり、ごちそうされると、仕事せんとあかんからなあ。」

山ちゃんとはつしやんは、大工さんだ。棚を作れとか、雨戸を直してくれとか、ただで仕事をさせられることが多い。

「戸の調子が悪いけど、それは今度でええけ。ゆつくりしていつて。」

四角い顔と丸い顔の二人の目は、空を向いた。もう少し飲みたくなかったよ

うだ。

そのとき、

「どろぼうー。」

と大声がした。驚いたみんなは、となりの勝原さんの家へ急いだ。

オトやんが、勝原のおぼちゃんに腕をつかまれていた。売りに出される子

牛みたいな目を、オトやんはしている。「ちようどよかった。あんたら、見はつ

といて。」

勝原さんは、警察に電話をしいつた。警官が来て調べた。オトやんは柿を

二個持っていた。けれども、勝原さん

ちになつているものとは、形がちがつて

いる。

勝原さんは、あやまることもなく家に入つていつた。

「大変じゃつたのお。」

父がいうと、おじぎをし、オトやん

は県道を歩きはじめた。みんなが見守つていて、二百メートルくらい

で、オトやんは立ち止まった。そこには、お地藏さんがまつられている祠がある。

オトやんは、背負つたかごから、色々なものを取り出した。バナナやミカン、そして柿も。

「あんなもん供えて、せつかくみんなからもらえたのに、カラスのえさじや。

感謝知らずかいのお。」

山ちゃんは、首を横にふつた。

「いや、それは違う！」

はつしやんのタヌキみたいな顔の眉が

きゅつと縮んだ。

「あの人の村にわしのいとこが、おるん

じゃけど。それがいうには、オトやん

の、お父さんは、人助けいっぱいしてるんじやと。じゃがのお、なーんも自慢

せん人で、口数が少なくて、『地ぞう

さん』と呼ばれとつたんじや。」

みんなは黙り、ひざまずいて拜んで

いるオトやんを見つめた。

秋の村祭りが終わったころ、村の神社でぼくは神楽を見た。

細い目、赤い唇、光る白い顔。女面は怖いくらいリアルだ。

舞台の右端の下に、作業服のおじさんがいた。おじさんは白い衣装の人に

追い払われたのだが、焚火に照らされた横顔を見て、ぼくは驚いた。オトや

んだつた。大杉の暗がり、彼ははしばらく立っていた。が、踊り始めたのだ

ろう。白い手を闇の中に浮かび上がる

せた。演目が変わつた。金糸、銀糸の刺しゅうのある赤や青の衣装は、たいそう豪華だ。コマのように、みんなはくるくる

完璧に回る。おろちが現れる。火薬の匂いがして、煙が広がっていく。オトやんの姿は消えていた。

すごい拍手の中、オトやんの転びそうな、切ない舞いを、ぼくは思い出した。くすぶつた炭みたいな感じの神楽。それが、心に引つかかっている。

鋭い、今しかないような笛の音。ぼくの心に刺さつたままだ。

焚火の炎が、パチツとはじけ、星空に舞い上がった。

## 多仁田 敏幸

非常勤職員 大阪府

### 受賞のことば

住んでいる町で、一日に四回、虹を見ました。そのときお願いしたことが叶ったのかもしれませんが。素晴らしい賞に選んで頂き、有難うございます。うれし涙をにじませつつ、新しい作品に挑戦しています。どんなものが生まれるのかな。楽しみです。



### 審査員コメント

いわゆる門付で暮らしを立てているオトやん。彼の辛く暗い過去の悲劇も淡々とした簡潔な文章で語られます。抑制の効いたその手法が却って、この物語の悲しさを際立たせているよう。ラストの舞いのシーンが、くつきりと切なく胸に迫ってきました。

富安 陽子